

## (実施報告)

# 第1回人文学の社会実装キャラバン

2025年11月16日(日)・17日(月)の2日間にわたり、宮城県気仙沼市ならびに岩手県陸前高田市にて、人文研究センターと各地域との交流事業を行った。気仙沼市図書館での詩のワークショップ開催にあたり、蜂飼耳さん(比較文明学専攻)もキャラバンに参加した。当センターからは、松原宏之センター長、中村百合子委員(教育学専攻)、尾崎名津子委員(日本文学専攻)が運営を担当した。その様子を以下に報告する。

### 1日目:『ことばと出会う。詩のワークショップ』(気仙沼市図書館)



2025年11月16日(日)13時30分から15時45分まで、気仙沼市図書館で『ことばと出会う。詩のワークショップ』が開催された。図書館と立教大学人文研究センターとの共催事業であり、令和7年度気仙沼市図書館読書週間行事とも位置付けられている。事前に申し込みのあった参加者に加えて、元・気仙沼市図書館長で気仙沼自由芸術派の詩人でもある千田基嗣さんも参加された。

千田さんは『絵本 湾』(気仙沼自由芸術派、2024年11月)を刊行した。絵本を創ることが夢だったという。大阪出身で2023年から気仙沼に活動拠点を移した、イラストレーター・画家の山本重也さんによる、気仙沼湾の各所を描いた絵と、千田さんの手による詩14篇によって構成されている。千田さんの詩は、(全篇というわけではないが)カタカナ語が踊る軽快で開放的なものが多い。シティポップのようなおしゃれな雰囲気がありますね、と言ったら、少しはにかんでいらつしゃった、気がする。それは、1956年生まれの千田さんが大学進学以降過ごした東京の雰囲気(千田さんはそのままアパレル業界に就職してしばらく東京のファッションの最先端を見てきた方なのである)を反映したのもであらうし、なにより、明るい「湾」に育まれた千田さんご自身の軽やかさにあるのだろう。千田さんに『絵本 湾』をご寄贈いただいた。立教大学図書館に配架される予定である。

千田さんにはまた後ほどご登場いただくけれども、ここでワークショップの報告に戻る。

ワークショップは2部構成だった。前半は、タイトルを省いた近現代以降の詩が複数載ったプリントが配布され、参加者がそれぞれの詩を読み、詩の本文から思い浮かぶタイトルを各自が自由に述べた。図らずもタイトルを言い当てた参加者もいて、クイズ大会の趣もあったが、意外外、でも、説得的なタイトルが次々に挙がってきたことで場があたたまった。その雰囲気のまま、会の後半に入った。

大岡信が連句に発想を得た「連詩」の実践というものがあるという。その解説を蜂飼さんからいただいたあと、参加者全員がそれぞれの思いついた一行をホワイトボードに書き、連ねていった。それがそのまま「詩」になるのである。最終行は蜂飼さんが書くことで全体を締め、さらに、タイトルをつけるところでワンセットだ。これを2回行った。つまり、講師も含めた全員で作った詩が2篇できた、ということである。



試みに、最初にできあがった詩を以下に紹介したい。

### 「風を待つ」

やってきました気仙沼

プラタナスの実が落ちている

どこから来たの？ 鈴懸のみち

図書館に続く坂道

男の子が女の子のカバンを持ってあげている

うんとこせ どっこいせ

枯れ葉が舞い散り絡みつく

海の香りを運ぶ風

澄みきった青 青 青

これが青春

昔も生き、今も生きる

船は 沖へ向かう

共同制作の実践は、筆者自身の研究領域では論究の対象になるものの、実際に取り組んだことはほとんどなかった。大学院時代の会食の席では連句の習慣が残っていたが、句を連ねた紙が自分のところに回ってくると身を固くしてしまい、しばらく留め置いて、こっそり隣に回した。決まって見つかってしまい(むしろ観察されていたのかもしれないが)、「なんだ、書かないのか」と言われると、自分につかりしたものだ。

個人の苦い思い出は措き、今回のワークショップでは前半の取り組みがポジティブに機能したため、連詩の制作も和やかに進んだ。1つ完成できればと考えていたところ、2篇も仕上がったのがその証拠である。

先にご登場いただいた千田基嗣さんには、ワークショップの開催前、開催後に気仙沼の街をご案内いただいた。特に、筆者の専門的な興味関心に照らしては、内湾の神明崎と浮見堂、管弦窟、猪狩神社や二代目恵比寿(と浮見堂脇にある三代目恵比寿)が印象に残った。管弦窟のかたわらには落合直文の歌碑があった。落合直文といえば、明治期における韻文の革新運動を担った一人である。その落合が、仙台藩伊達家御一家筆頭で気仙沼の名家・鮎貝家の生まれだったのだ。それも知らずに千田さんにご案内いただくまま管弦窟に近寄り、意外の感に打たれた自分の不勉強を呪いつつ、思わぬ出会いに心を動かされた。気仙沼から進学のため仙台に出て、そこで落合家に養子に入り、さらに東京に出て日本語・日本文学の近代化に生涯をかけたエネルギーや志の高さに触れた思いがしたのである。

浮見堂と猪狩神社それぞれの脇にいる恵比寿像の話も興味深かった。東日本大震災時の津波により、二代目の恵比寿像が流されてしまった。搜索するもみつからず、企業等の協力を得て、三代目恵比寿像が鑄造、2020年5月に奉納された。しかし、奉納の1ヶ月前に、浮見堂からごく近くの海底で、二代目の恵比寿像が発見されたのである。結局、三代目は予定通り奉納され、二代目は猪狩神社の本殿右手に鎮座することになった。二代目はタイを釣っているが、三代目はカツオという違いがある。私見では二代目がふくふくした体型である一方、三代目は筋骨隆々で、その違いが不思議だ。

三代目の恵比寿像がカツオを釣っているというのは、もちろん気仙沼の産業を意図してのものだ。気仙沼といえば遠洋漁業の街である。それによって資産を蓄えた網元が相当多くある。そうした豊かさが、歌を詠み詩作をし、絵画も楽しむような文化的な風土を作りあげたことは間違いない。

千田さん、また、ワークショップの実現に関わりさまざまご尽力、ご高配を賜った、気仙沼市図書館のみなさまに心から感謝申し上げます。

尾崎 名津子(人文研究センター委員／日本文学専修准教授)

## 2日目：旧吉田家住宅主屋、立教大学陸前高田サテライトキャンパス

翌日に業務のあった尾崎さんと別れ、一日目の夕刻、すっかり暗くなってから陸前高田に移動した。翌朝起きてホテルの窓から見た景色は、変わらぬ、被災した市街地だった。東日本大震災から十年は国から大規模な復興財源が入って、市街地はいつも大きなトラックが走り回っていた。今、14年が過ぎ、トラックの姿は消え、土木系の復興事業はほぼ終了したのかなと思う。海沿いは巨大な防潮堤で囲まれ、そして震災直後には沼地のように見えてしまっていた町が全体にかさ上げされてきれいに整えられた。

私は震災後に陸前高田を時々訪れてきたが、この町の全体を見ることができる、毎回のように行く場所がある。箱根山展望台だ。こちらに、松原さんと蜂飼さんと一緒にまた行きたかった。この日、陸前高田でいつもお世話になっている千田信男さん、礼子さんにご紹介いただいて、礼子さんの弟さんの藤原出穂(いずほ)さんと10時からお会いすることになっていた。ひょっとしたらと思いついて、朝、信男さんに、これから箱根山に行くのだけれど、一緒に行き街のことを改めて聞かせてくださらないかとショートメールを送ってみたら、ご快諾くださった。こうやっていつも、陸前高田の人たちに甘えて、受け入れてもらってしまってきた。



風がとんでもなく強く、けれど晴れあがった空の下、高台から陸前高田市街地の全景をみなで眺めた。ご案内くださった千田さんご夫妻と、被災前を知らない私たちの胸の内が同じであったとは思えない。同じところに立ち、同じものを見つめ、そしてことばでは震災前後について語り合いながら、一人ひとりにはきつとかなり異なる思いや感情が去来していたのではないかと。すぐにことばにできるものではない何かを、この場所は与えてくれる気がして、またきつと行くだらうと思う。

その後、五人で一緒に旧吉田家住宅主屋([陸前高田市による歴史紹介](#)、[高田旅ナビの紹介](#))に向かった。吉田家は、仙台藩の大肝入(同藩の地方支配機構の村の最高役職で世襲制)だった。1802年に建てられ、岩手県指定有形文化財になっている。ちなみに、吉田家のもっていた記録類は「吉田家文書」とされ、市立図書館が所蔵していたが、こちら津波で水に濡れ、多くの人が関わって修復作業がされ、現在は岩手県立博物館に収められている。

主屋のそばには、震災まで、吉田家のおばあさまがお住まいだったという。吉田家の住宅は震災で破壊的な被害を受け、部材は流された。それを一つ一つ集め、洗浄し、乾かし、そして復興させる。この気の遠くなるような事業が取り組まれることになった。その時、地元で長く、気仙大工の棟梁として活躍してこられた、藤原出穂さんが頼られた。私は、信男さんと礼子さんのお宅でお茶をいただいていた時に、一度、お会いしたことがあり、この方の棟梁としてのお仕事を一度、現場で拝見してみたいとずっと思っていた。松原さんと蜂飼さんと一緒に吉田家住宅主屋を訪れるという機会に、できれば出穂さんにそこで話をうかがいたいということで、思い切ってお願いしてみた。それで、出穂さんはお時間を作って、いらしてくださったのだ。なんと、松村仁館長ご夫妻も案内に加わってくださった。ところで気仙大工とは何か、と興味をもたれた方は、藤原さんも出席されている[こちらの](#)座談会記録をご覧ください。この地域の「在方集住大工」とのこと。



吉田家住宅主屋は2025年春、復元・復興された。この過程については、読売新聞社がとてもきれいなスライドショーを公開しているので、[そちら](#)をぜひ参照されたい。出穂さんのお仕事の姿もプロの写真で見られて、説明も詳しい。岩手めんこいテレビの[こちら](#)の報道でも、経緯がよくわかる。この日、受け継がれている気仙大工の技について、復元された吉田家住宅主屋で、棟梁の出穂さんから直接話をうかがうことができ、受け継ぎ、前に進める、この伝統の世界の厳しさ、堅実さ、着実さの美しさに胸を打たれた。

陸前高田の人たちと市と県が大震災という危機の後、文字どおり協力して吉田家住宅主屋の復元を成し遂げたことは、この地域が自らの歴史と伝統文化の維持・発展に対してもつ誇りを雄弁に物語っている。岩手めんこいテレビの報道では地元の方たちがどんな思いを語ってくださっている。「新しいものを買ってきてやった方が早いべな」と思っているが...それではなんかね、歴史的なものにはならないっていかね...」と出穂さんはおっしゃっている。復元が目的なので当たり前と言ってしまうが、実際の復元の苦勞の道のりは、常に、先人への敬意の思いのもとにあったことがうかがわれることばだ。

千田信男さんと礼子さんは、本学の教職員が陸前高田と言えば頼りにする方で、信夫さんは岩手大学と本学が共同で2017年4月から2025年3月まで開設・運営していた陸前高田グローバルキャンパスに勤務していただいていた。昨年(2025)年7月、本学は市街地の陸前高田高等職業訓練校内に[立教大学陸前高田サテライトを開設](#)した。この日は、吉田家住宅主屋の見学の後、今後のゼミ合宿等での活用を視野

に三人でこのサテライトを見学した。その後、元・陸前高田図書館長の菅野祥一郎館長に短時間お会いして、今後のご指導を改めてお願いした。

東京にいて、しかも大学という場で若い人たちと日々出会っていると、変化することが前進し進歩することのような文化の中に身を置いているような気がする。実際、人間や社会の本質は変化なのだろうが、陸前高田という地は、その変化とはどうあるべきかを考えさせてくれる。

この日、陸前高田でお会いしたすべての方が、私どもの短時間の訪問にあわせて、あたたかく、たいへんなご配慮をくださってご対応くださった。ほんとうにありがとうございました。御礼が最後になってしまって恐縮でございます。

文：中村 百合子(人文研究センター委員、教育学専攻教授)

写真：松原宏之(人文研究センター長／超域文化学専修教授)

## キャラバンを終えて

人文学は大学の中にだけあるのではない。

詩を読むとき、景色をながめるとき、建物をつくり、維持するときにも、普段づかいの文学や哲学や歴史学はいつも一人ひとりと共にあり、地域の中にあり、社会のあり方と深く結ばれている。みなさんが存分に(人文学する)お手伝いをし、そして文学部の教員たち同士がたがいの方法をもっと知り、お手伝いのスキルをあげるために、2025年度人文研究センターは「人文学の社会実装キャラバン」を初めて開催した。お迎えいただいた宮城県気仙沼市ならびに岩手県陸前高田市のみなさまに感謝を申し上げます。

「第一回 人文学の社会実装キャラバン」と銘打った。第二回、第三回とこの試みが続いていくことを祈っている。人文学はもっともっと社会とともにあって良い。

松原 宏之(人文研究センター長／超域文化学専修教授)

